

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.2 February 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

- 巻頭言
キタラ村におけるシャーマンとの出会い
／井上昭夫 1
- 天理教教理史断章 (50)
梅村文書③
／安井幹夫 2
- 天理教海外伝道の資料 (2)
上海伝道関連史料②
／深川治道 4
- 「二つ一つ」の環境学 (29)
今、日本の森林が危ない! ②
林野行政失策の歴史から学ぶ
／佐藤孝則 5
- 今日の時代における宗教批判の克服学 (14)
宗教者と信仰者についての一考察 (続き)
／金子 昭 6
- ハワイ人とキリスト教: 文化と信仰の民族誌学 (11)
ハワイ人の主権回復運動⑤
／井上昭洋 7
- 世界平和のための宗教対話 (18)
人を守る難しさ
／山口英雄 8
- 天理異文化伝道の諸相 (67)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [33]
／森 洋明 9
- 第8回天理スポーツ・ギャラリー展報告 (12)
バドミントン
／難波真理 10
- 図書紹介 (50)
『日本語の正体—倭の大王は百済語で話す』
／松尾 勇 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14
平成 21 年度公開教学講座第 9 講 / 第 222・
223 回研究報告会

巻頭言

キタラ村におけるシャーマンとの出会い

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

パウロ・ワンゴラ氏は、「汎アフリカ主義」の闘士としても知られている。彼は現在、消え行く民族固有の文化・言語への危機感から、ンパンボ・アフリカン・マルティヴァーシティという大学校を建設中である。場所はウガンダの東南に位置する白ナイル源流の近く、ジンジャ市北方のサバンナにあるイセゲロ村である。氏から、ブソガ族には秘伝をもつて治癒するハーバリストとシャーマンがいるので、ウガンダに来て治療をしないかとの誘いがあった。筆者が強度のストレスと過労からアフリカより帰国した直後、脳梗塞に襲われ入退院を繰り返していたのを知っていたからである。無理を押しして 2009 年の 8～9 月にかけてウガンダに渡航したのもちまへの好奇心からでもあったが、ワンゴラ氏が交渉し実現したシャーマンの儀式に深夜招待されたのは幸運であった。

シャーマンは Kabona Mugalula Wamala と称する 40 前後の男性である。ワンゴラ氏の通訳を通して、2 人の間にはさまざまな問答があった。ワマラはエンテベ市の Kitara 村にある 50 数名から成る氏族のスピリチュアル・リーダーであり、トーテムは Grasshopper (飛蝗) に属する。

伝統的な茅葺の直径 6 m ほどの聖なる円形土間空間は Shrine (神社) と呼ばれ、その中では 30 数人の主婦や青年が薄暗いランプのもとにぎっしりと並び、ジャンベと呼ばれる打楽器の演奏を加えて 2 時間ほどのコーラスを伴った儀式があった。中には赤ん坊を抱っこした母親たちもいて、初めて見る日本人に投げかけられる好奇の視線を感じながら、彼女たちが朗唱するコーラスの清らかな調べには感動させられた。祭壇らしきものは、この家屋入口の正面奥に設けられ、中央には神具と思われるトーテムを立て、香料を焚き、霊に捧げる供物が並べられていた。儀式が終わる頃に、ワマラは氏族が生育したコーヒー豆が入った大きな木製の皿を筆者の前に差し出した。それを 2、3 粒つまんで食べよと言うわけである。お返しに当方からは、存命の

教祖中山みきのお下がりだと説明して、日本より持参した「御供」を与え、この小さな三角形に折られた紙袋の中に入っているものは何かと問うてみた。即答がないので、これは「聖なる米」であると答えると、参会者からわっという声がいっせいに上がった。

ワマラは彼らの信ずる宇宙創造の物語から始めて、終わると問答に入った。詳細は略するが、印象に残ったのは日本の宗教において「昆虫」は世界の中でどのような位置にあり、どのような日常的宗教生活との関係にあるかという問いであった。「飛蝗」をトーテムとするきわめてスピリチュアルな氏族からのエコロジカルな質問である。回答には一瞬とまどったが、「元の理」をベースに汎神論的な返答でその場を濁した次第である。

儀式の最後に合唱された霊歌の歌詞の意味を問うと、両者の先祖霊群を呼び出して、筆者の病の回復を祈る意味をもつと聞いて、不思議に心が現実の世界に戻り、にわかに身体が安らくなった感じがした。野外に出ると都会では見ることができない星々が満天を覆い、まわりには暗黒の自然が横たわっていた。古今東西を問わず、整然と運行する星座群も虫鳥畜類と共に文化・自然的意味と物語を持って人間と共に生き続けている。

ウガンダには 65 種の氏族トーテムがあり、同氏族間での結婚は禁止されている。トーテムは母系・父系によって異なるが、トーテムとされるさまざまな動植物は、その種族の先祖霊と繋がっており、殺したり傷つけたりしてはならないという掟になっている。トーテムは、また共同体の社会的アイデンティティを強固にし、宗教的・神秘的な意味をもちながら、人間と自然界の調和を伝統的に保ってきた。近代化したアフリカ大陸には、現在においてもトーテムの醸し出すスピリチュアリティが、個人や氏族をつなぐ社会的機能を果たしている。トーテムの伝統的文化思想が、霊性と生態・環境の調和を共同体の中に仲介する役割を果たし、不安定な近代国家体制の底辺を支えているのである。